

[A] 外戚－テキストP16対応－

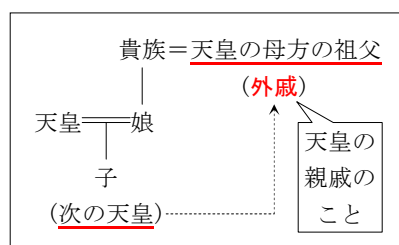
奈良時代には、律令制度に基づいた政治体制において、左大臣・右大臣・大納言などで構成される太政官が重要な地位を占めていた。でも、9世紀初めの桓武・嵯峨天皇の時代になると、蔵人頭や検非違使など天皇直属の機関が設けられたことによって、天皇の権力が強まることになった。

そのため、貴族が朝廷での地位を確保するには、天皇と如何に個人的に結びついていくかが鍵となっていく。つまり、桓武・嵯峨天皇時に天皇の権力が高まったので、それなら「天皇の親戚になっちまえば出世できるじゃねえか！」と有力な貴族は考えたわけだ。そこで、天皇と個人的に結びつくため、貴族は外戚という婚姻関係を利用しようとしていくんだ。

戚

＜外戚＞

外戚というのは、一言で言ってしまえば天皇の親戚のこと。例えば、ある天皇のもとに自分の娘を嫁がせる。そして、天皇の後となった自分の娘が、その天皇との間に子供を生み、生まれた子が次の天皇になることができれば、自分は天皇の母方のおじいちゃんになれるよね。こういった天皇の母方の祖父のことを外祖父といい、天皇の母方の親族となった外祖父母・おじ・おば・その子などを全部含めて外戚と言うんだ。



もともと7世紀からは、夫と妻が別々の家に住み、夫が妻の家に通う妻問婚という婚姻形態がとられていた。でも、平安時代の11世紀あたりからは、招婿婚（婿入婚）といって、結婚後、夫が妻の実家に住むか、またはその近くに住む婚姻形態がとられていくんだ（天皇家の場合は、天皇が普段生活していた内裏とは別に、里内裏という仮の皇居が設けられた）。

そのため、たとえ天皇家であろうが、生まれた子供は藤原氏などの外戚となった母方の家で育てられる。つまり、幼い頃から将来天皇となる自分の孫を手元で育ててコントロールしておき、この外戚関係を利用して権力を伸ばしていけるわけだ。そして、このような外戚関係を利用して権力を握っていった貴族こそが藤原氏だったんだ（平安時代の後期になると、武家の間では、戦いなどの必要性から逆に妻が夫の家に住む形態が始まっていく。そりゃあ、武家では夫が戦などに出るわけですから、夫が妻の実家に住む形だと不都合が出てくるからね。このような女性が男性の家に嫁ぐ婚姻形態を嫁入婚といい、鎌倉時代になると招婿婚に代わって、この嫁入婚が一般化していく）。

ただし、この外戚関係は藤原氏が独占できるものではない。当然、藤原氏以外の橘氏・伴氏などの他の貴族も、外戚関係を築こうとしていく（例えば、橘氏では嵯峨天皇の皇后で、仁明天皇の母となった橘嘉智子などがいる）。そのため、藤原氏はこうした邪魔な勢力を退けるため、無実の罪を着せたりして、橘氏・伴氏などの他の貴族を排斥していったんだ。

[B] 藤原良房－テキストP16 対応－

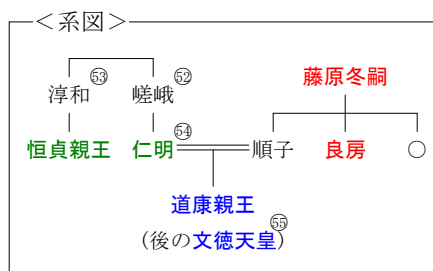
その中で台頭していったのが、810年の菓子の変の際に、蔵人頭に任命された藤原冬嗣の子である藤原良房だ。この良房こそが外戚関係を利用して、なおかつ他の貴族を排斥していくんだけど、そのためには当時の系図を頭に入れておかないと理解できない。そこで、その当時の系図を確認してみよう（[摂関政治]は、天皇家・藤原氏の系図をもとに出題されることがある。また、初見史料などの問題でも系図を手がかりにして考えないと解けない問題も出題されるので、必ず系図を押さえてほしい。ゆえに、各項目において逐一系図を挿入しておくので、必ず参照するように）。

右の系図を見るとわかるように、当時の天皇である仁明天皇に、藤原良房は妹の順子を嫁がせていて、その間には道康親王という子供が生まれている。だから、この道康親王が次の天皇として即位すれば、良房は天皇の外戚となることができる。…ということは、何としてでも、この道康親王を次の天皇にしたいよね。

ところが、実は次の天皇候補である皇太子は、淳和天皇の子供である恒貞親王と決まっていた(当時は最も権力を持っていた嵯峨上皇が生きていたため、皇位継承はすべて嵯峨上皇に委ねられていた。嵯峨上皇は、自分の弟である淳和天皇と、自分の子供の仁明天皇にそれぞれ皇位を継がせようと考えていたため、淳和→仁明→淳和の子供(恒貞)→仁明の子供(道康)という順番になっていた)。

良房からしてみれば、これが気に喰わない。なおかつ、皇太子である恒貞親王は、橘氏の血が濃い人物でもあるので、逆に橘氏が台頭してしまう可能性がある。自分が権力を握るためには、外戚となる必要があるので、どうしても道康親王を即位させたい。ところが、嵯峨上皇がまだ生きていて目を光らせているので、動くに動けない…。

そんな状況の中、842年に嵯峨天皇が病気で亡くなると、もう邪魔者はいないよね。そこで、この嵯峨上皇の死の直後ついに良房が動く。それが842年の承和の変なんだ。



<承和の変(842)>

嵯峨天皇の死の混乱に乗じ、恒貞親王の側近である伴健岑と橘逸勢が、皇太子恒貞親王を奉じて反乱を企てているとの密告があり、2人が逮捕された事件。これにより、恒貞親王は皇太子を廃され、伴健岑は隠岐に、橘逸勢は伊豆にそれぞれ配流された。その後、恒貞親王に代わり道康親王が皇太子となった。

でも、これは本当おかしな事件だね。そもそも恒貞親王は皇太子だから、放っておいても次の天皇になることができる。そして、その側近の伴健岑も橘逸勢も、恒貞親王が天皇になれば出世することができる。だから、わざわざこの2人がクーデターを起こす必要はまったくないわけだ。

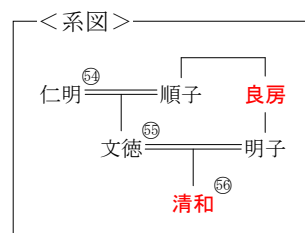
ゆえに、この2人は冤罪(無実の罪)であると考えられ、この事件は良房が自分の権力を確立するために起こしたものだといわれている。とにかく、この事件によって恒貞親王は皇太子を廃されて、代わって道康親王が皇太子になる。そして、850年に仁明天皇が死亡したため、この道康親王が即位して文徳天皇となるんだ。

<承和の変(842)の覚え方>

「野心に満ちた承和の変」
→ ㄞ(8) ㄣ(4) んに(2)

ところが、24歳で即位した文徳天皇は病弱で、857年に重病になってしまった。そのため、もはや自ら政治を行っていくような体力はない。そこで、外戚にあたる藤原良房を呼び出して「伯父さん、僕はもうこれ以上政治を行っていく力はありません。だから、伯父さんを太政大臣に任命するので、政治を取り仕切ってもらいたいです。」と、藤原良房を人臣(皇族以外のこと)で初の太政大臣に任命したんだ(太政大臣は律令制度の最高職で、大宝律令施行以前には大友皇子・高市皇子が任じられた。基本的に皇太子が任じられる役職で、皇族以外には与えられない則闕の官であったが、この良房が任命されたのが人臣では最初ということになる)。

でも、結局文徳天皇の病気は治らず、彼が死んでしまったので、翌年の858年に、藤原良房の娘明子と文徳天皇の子である清和天皇がわずか9歳で天皇に就くことになるんだ。



でも、9歳に政治が分かるわけがない。だから、この9歳のガキンチョ清和天皇の代わりに政治を行う人物が必要となる。そこで、藤原良房が、幼少の天皇の代わりに政治を行う摂政を務めることになるんだ。ただし、この時点では正式に摂政に任命されたのではなく、役割自体が摂政と同じということなので「事実上の」摂政と言われるんだけどね。つまり、9歳の清和天皇が「良房おじいちゃんを摂政に任命します」なんて儀式を行えるわけがないので、まだ正式な摂政就任の儀式は行われていないが、858年の時点ですでに摂政の役割を任されていた、ということだ。

<摂政・関白の違い>

摂政…天皇が幼少の時に、天皇に代わって政治を執り行う者のこと。

関白…天皇の成人後、天皇を補佐する者。また、この関白に準ずる役職で、宣下に先立って政務関係文書に目を通す役職を内覧という(後述する)。

※摂政・関白をあわせて摂関という。なお、摂政・関白はどちらも令外官(大宝令制定後に新しく設立された、令に規定されてされていない役職)

摂政・関白に就任すると、天皇と同じように、貴族に「正(従)一位」・「正(従)二位」などの位階を授けたり、「大乗大臣」・「左大臣」・「右大臣」などの官職に任命したりする任免権を持つことになる。そして、位階を授けることを叙位、官職に任命することを除目というんだ(後者の読みは「じょもく」ではなく、「じもく」なので注意しておいてね)。

さて、清和天皇の事実上の摂政として権力を握っていた良房だけど、まだ彼は、正式には摂政には就任していない。その良房が正式に摂政に就任する契機となった事件が866年の応天門の変だ。

<応天門の変(866)>

866年3月に、平安宮朝堂院の正門である応天門が炎上したことをめぐる疑獄事件(平安宮朝堂院とは、平安京の大内裏の中にある、即位など重要な儀式を行う建物のこと)。この応天門が燃えたことは、初めは「天災か人災か知れず」と言われるぐらい、単なる不審火であるのかも、放火であるのかもわからなかった。しかし、その後すぐに当時大納言であった伴善男が「犯人は左大臣の源信である」と密告。これにより、左大臣の源信が容疑者にあがったが、太政大臣藤原良房により源信の無実が判明される。

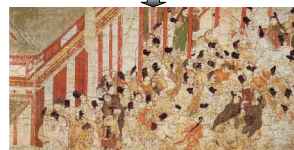
その後、事件は5ヶ月間近く謎につつまれるが、8月になり下級官人であった大宅鷹取が「実は大納言の伴善男こそが真犯人である」と告発。彼の娘が「その事件の日に伴善男と、その子中庸が事件の夜に応天門から逃げ去るのを見た」と告発したのである。

このため、伴善男の取調べが行われることになった。伴善男は「自分は犯人ではない」と強く否定したが、その取調べの最中に、大宅鷹取の娘が殴り殺され、大宅鷹取自身も怪我をさせられるという事件が起きる。そして、この傷害事件を起こしたことで捕まった犯人2人が、伴善男の付き人であったのである。その彼らが「伴善男が当時対立していた左大臣の源信を失脚させるために、子供の中庸に命じて放火させた」と自供。これにより、伴善男も中庸も2人とも自白し、家財を全て没収されたうえ、伴善男は伊豆国へ、中庸は隠岐国へそれぞれ配流となった。なお、この事件に関係したとして、紀夏井・紀豊城もそれぞれ土佐国、安房国へと流された。そして、この事件を解決した立役者として、事件途中で、良房は正式に摂政に任命された。

<『伴大納言絵巻』より>



[炎上する応天門]



[逃げまどう民衆]



[大宅鷹取の娘の証言]

この応天門の変(866)を解決した功績で、866年に藤原良房は正式に摂政に任命されることになる。その一方で、承和の変(842)における伴健峯に続いて、伴善男も失脚することになった伴氏は政治的に無力になってしまうんだ(伴氏とは、古墳時代に登場した大伴金村などの大伴氏のこと。それまでは大伴と称していたが、53代天皇である淳和天皇が即位すると、その本名である大伴親王を考慮して、それ以降は「大」の字を除いて伴氏と称した)。

なお、この応天門の変に関しては以上の内容が真実だけど、これも不審火を利用した良房の他氏排斥事件ではないか、という見方もある。そのため、後世では「応天門の変も藤原氏による策謀ではないか」と考えられて、この応天門の変を題材にして描かれた院政期の絵巻物『伴大納言絵巻』では、伴善男を悲劇の主人公として扱っているんだ。

＜応天門の変(866)の覚え方＞

「ヤロー、無実の応天門」

→ ヤ(8)ロ(6)ーむ(6)

Ⅲ 摂政のはじめ『日本三代実録』

(貞観八年)八月十九日辛卯、太政大臣に勅して天下の政を摂行せしむ。

(応天門の変の直後の貞観8年(866年)8月19日、清和天皇が太政大臣(藤原良房)に、天皇に代行して政治を摂り行なう摂政に命じる文書を下された)

[C] 藤原基経一テキスト P16 対応一

権力を掌握した藤原良房が、872年に亡くなったため、良房の養子である藤原基経が後を継いで、そのまま摂政を担当することになった(良房には男子がいなかったため、彼の兄である長良の息子である基経が養子となった)。そして、清和天皇の摂政として政治を補佐していくんだけど、清和天皇は病弱で、しばしば熱病になることもあった(30歳で亡くなる)。そのため、876年に27歳で譲位して、当時9歳であった息子の陽成天皇が即位することになるんだ(基経の妹である高子と清和天皇の子)。

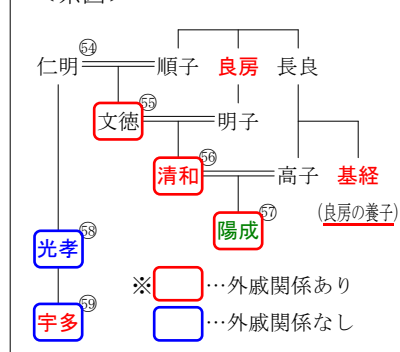
ところが、この陽成天皇…、この人、暴君として有名な人。まあ、キ〇ガイやね。一説によると、彼の趣味は殺人で、囚人を騙して裸で塔に登らせ、それを矢で射殺したり、女官を縄で縛って、池に投げ込み溺死させたりして楽しんだとも言われている。そして、17歳の時には、自分の乳母であった人物の息子を殴殺してしまった。

さすがに、こんなキ〇ガイにこれ以上天皇を続けさせることはできない。そこで、基経によって陽成天皇は退位させられることになるんだけど、ここで問題発生。系図を確認してほしいけど、この陽成天皇にはまだ子供がいらないから、次の天皇后継者として適当な人物がいなかったんだ。

基経としては、自分の権力を維持していくためには、天皇の外戚であることが最も重要。今までの文徳・清和・陽成天皇は、良房や基経の外戚であったから、太政大臣・摂政にまで上り詰めることができたわけだしね。でも、陽成天皇は人殺しをしてしまったキ〇ガイだから、天皇をクビにしなければならぬ。基経としても外戚関係にある天皇を即位させたいんだけど、それが出来ない状況だったわけだ。

そのため、やむを得ないけど、外戚関係のない仁明天皇の子光孝天皇を天皇に即位させることにしたんだ。でも、光孝天皇は大喜び。彼は仁明天皇の子であるとは言っても、皇位継承は文徳天皇系の家系で続いていたから、もはや天皇になるのは諦めていた。そうしたら、陽成天皇が天皇を退位させられて、基経の推挙により55歳というジジイで、棚ぼた的に天皇に就くことができたわけだから。

＜系図＞



光孝天皇は、自分を天皇に推薦してくれた基経に感謝感激雨あられ！そこで、そのお礼として、基経に政治を一任することを決めて、基経は事実上の^{かんぱく}関白となったんだ(まだ正式に関白に任命する儀式は行われていないが、関白の役割を任せられていたということ)。

なお、なぜ光孝天皇の年齢がわざわざ 55 歳のジジイであると記したかという、それだけの高齢であり天皇が成人しているということを把握させるためだ。そう考えれば「摂政」ではなく、「関白」に就任することがすぐにわかるよね。つまり、系図を学習していけば、先ほどの 9 歳で即位した清和天皇や陽成天皇はガキンちゃだから「摂政」に就任し、ジジイの 55 歳で即位した光孝天皇や、次の 21 歳で即位した宇多天皇は成人しているから「関白」に就任するんだ、って理解できるよね。

＜太政大臣・摂政・関白就任の整理＞

- ①文徳天皇(藤原氏と外戚関係あり・重病)→藤原良房が「太政大臣」に就任
- ②清和天皇(藤原氏と外戚関係あり・ガキ)→藤原良房が「摂政」に就任
- ③陽成天皇(藤原氏と外戚関係あり・ガキ)→藤原基経が「摂政」に就任
- ④光孝天皇(藤原氏と外戚関係なし・成人)→藤原基経が「関白」に就任
- ⑤宇多天皇(藤原氏と外戚関係あり・成人)→藤原基経が「関白」に就任

でも、光孝天皇は 55 歳というジジイで即位したため、3 年後に死んじゃった。そこで、基経の推薦で、光孝天皇の子である^{うまた}宇多天皇が 887 年に即位することになるんだ。ちなみに、この宇多天皇も藤原氏と外戚関係ではないんだけど、彼も基経のおかげで天皇になれた人物。

宇多天皇は光孝天皇の 7 目の子供だったため、皇族から外されて「源」の姓を与えられていた(皇族から離れ、天皇の臣下の籍に降りることを臣籍降下という)。だから、本来は天皇に就けるはずがなかったんだけど、光孝天皇が死んだその日に基経の推薦によって皇太子となり、すぐに即位しているんだ。だから、この宇多天皇も自分を天皇に推薦してくれた基経に感謝感激雨あられ！そこで、そのお礼として、全ての政治を任せるということで 887 年に基経を^{かんぱく}関白に正式に任命したんだ。

図 関白のはじめ『政事要略』

^{ばんき}摂政太政大臣に万機を^{かんぱく}関白せしむる詔を賜ふ。

詔したまはく、「朕^{みこと}涼徳を以て茲に乾符を奉ず。…(中略)…嗚呼、三代^{みつだい}政を摂り、一心に忠を輸す。先帝^{せんてい}聖明にして、其の摂録を仰ぐ。朕^{みこと}の冲眇たる、重ぬるに孤聳を以てす。其れ万機の巨細、百官己に総べ、皆太政大臣^{たいていだいじん}に^{かんぱく}関白し、然る後に奏下すること一に旧事の如くせよ。主者^{しゅしや}施行せよ」と。

仁和三年十一月廿一日

(摂政太政大臣(藤原基経)に政務全般を^{かんぱく}関白させる詔を賜う

「朕^{みこと}は私(宇多天皇)は徳が少ないにもかかわらず皇位に就いた。基経は 3 代(清和・陽成・光孝天皇の 3 代)の政治を補佐し、忠節を尽くしてくれた。先帝(光孝天皇)は聖明であつたが、基経の補佐を受けていた。朕^{みこと}は私(宇多天皇)は無力で頼るものもないありさまである。そこで、太政大臣(藤原基経)を^{かんぱく}関白に任命し、全ての政務を経るようにせよ。」との命令が出た。

仁和三年(887 年)11 月 21 日)

上記の詔のように、宇多天皇は政治を全て一任するため、基経を関白に任じると勅書を出した。ところが、これに対して基経は断りを入れて辞退している。まあ、これは当時には、いったん任命されても一回目は断り、二回目で引き受けるという習慣があつたからなんだけだね。

そこで、「もう基経くんはツンデレなんだから～♡ もう 1 回任命すればいいいでしょ。」って、宇多天皇は再び基経に対し、関白に任ずるという勅書を出す。でもさ、2 回目も同じ文章だとつまらないよね？そこで、2 回目の詔では「関白」ではなく、あえて「阿衡^{あへい}」という語句を用いたんだ。

そして、この際に起きてしまった問題が阿衡の紛議(阿衡事件)という事件なんだ。

＜阿衡の紛議(阿衡事件)(887～888)＞

宇多天皇が藤原基経を関白に任じる際に起きた天皇と藤原氏の政治抗争。887年、宇多天皇は政治を全て一任するため、基経を関白に任じると勅書を出した。しかし、当時の習慣では、いったん任命されても一回目は断るという習慣があったため、基経はそれを辞退した。それゆえ、宇多天皇は再び基経に対し、関白に任ずるという勅書を出すのであるが、ここで問題が起きたのである。宇多天皇は関白の「諸事、みな先ず関り白すべし」という意味では失礼だと判断して、基経を「阿衡(中国の昔の高官名)」に任命するという勅書を出した(阿衡というのは、中国の高官のことであるが、役割自体は関白と同じ)。つまり、日本の高官名より、中国の高官名に任ずることで、そのイメージをよくしたのである。ところが、この阿衡という役職は中国の高官名であるが、名ばかりの名誉職であって、実際の仕事はまったくないのであった。そのため、これを理由に基経は激怒して、以後半年間も出仕するのをやめた。そして、この勅書を起草した、当時天皇の信任の厚かった橘広相の処罰を求めた。その翌年の888年、政務が行き詰った天皇は、やむなくこの勅書を起草した橘広相を処罰することを決定した。

でもさ～、冷静に考えると、わざわざ「関白」と「阿衡」の違いぐらいでいちいち怒らなくてもよくない？そう、この内容自体は些細なことであって、別に怒る必要はないんだ。実は、基経自体の目的はそんなものじゃなくて、別のところにあった。まず、1つ目が藤原氏のライバルである橘広相という橘氏の勢力を抑えること。当時、橘広相は宇多天皇から信頼されており、藤原氏の対抗馬となる可能性があった。そのため、この橘広相の処罰を基経は求めたわけだ(これにより、橘氏は承和の変による橘逸勢の失脚、阿衡の紛議による橘広相の処罰により衰退する)。

そして、もう1つの理由は関白の地位確立のため。既述したように、宇多天皇は藤原氏と外戚関係にはない。だから、基経としては、そういった外戚関係なしに関白という地位を完全たるものになさなければならない。そこで、わざと問題を起こし、天皇が謝罪するという形をとらせて、自らの関白の地位を絶対的なものとしたんだ。ほら、問題を起こしてしまって謝罪すると、もう頭が上がりなくなることってあるでしょ？つまり、この阿衡の紛議というのは、基経が自分の地位を確立するための一種のデモンストレーションであったわけだ。

＜阿衡の紛議(887)の覚え方＞
「ハンパな阿衡に基経ブチ切れ」
→ハ(8)ンバ(8)な(7)

これにより基経は自分の地位を絶対的なものにしたため、以後宇多天皇は基経に頭があがらない。でも、でも、宇多天皇からしてみれば、このような状態は面白くない。せっかく自分が好意で関白に任命してあげるよ、と言ったのに、基経は逆ギレしてきたわけだから。当然、藤原氏に対しては腸が煮えくり返っている。

だから、基経には頭が上がりなかったけど、もちろんそれは基経が生きているまで。891年に基経が死亡すると、そのあとは露骨に藤原氏に対して反発していく。そして、宇多天皇は藤原基経が死んだ後には、摂政・関白を置かず、天皇自ら政治を行う天皇親政を行っていったんだ(基経死後の宇多天皇による天皇親政のことを寛平の治という)。

＜藤原北家の政権担当者の覚え方＞

「冬に吉本(と)来たらタダ三年」

→冬(冬嗣)に吉(良房)本(基経)(と)来(時平)たらタダ(忠平)三年(実頼)

※時平・忠平・実頼はのちに出てくるが、これ以降の解説スペースの都合上ここに収録しました

[D] 寛平の治(宇多天皇の親政)ーテキスト P16 対応ー

藤原氏を抑え、宇多天皇が天皇親政を行っていくためには、まずは、それを行う天皇の権威を高める必要がある。そこで、権威を高めるために設けられたのが滝口の武士(天皇の住む庭の滝口という場所に詰めた定員 10 人程度の護衛兵)という天皇護衛のための兵だ。

一方で、藤原氏は藤原基経が死亡し、その子供の藤原時平が跡を継いでいたんだけど、天皇親政を進める宇多天皇は、時平を摂政・関白に任命しない。むしろ、その藤原氏の権力を抑えて、牽制するために対抗馬を抜擢したんだ。それが当時、文章博士(漢詩文・歴史を学ぶ紀伝道(文章道)の指導にあたる教官)であった菅原道真だ。そして、その菅原道真を蔵人頭(天皇の秘書長官)に任命して、彼を重用していったんだ。

< 蔵人頭 >

天皇の側近として、天皇の機密文書を扱う令外の官。ただし、それぞれ名称があり、その役所(機関)のことを蔵人所といい、その役所で働く役人を蔵人、そしてその長官を蔵人頭という(これら 3 つを混同しないように)。つまり、わかりやすく言えば、蔵人とは天皇の秘書である。ゆえに、蔵人は天皇の秘書官であり、蔵人頭は秘書長官、蔵人所は秘書の役所である。810 年の薬子の変の際に、藤原冬嗣・巨勢野足が蔵人頭に任じられたのが最初で、それ以後は、公卿への登竜門となるなど名誉かつ有利な地位となった。

菅原道真は学問の神様として有名な人物。そもそも彼は、文章博士という言葉ば歴史と漢詩文の教授という地位にあった人物だ。そこで、宇多天皇は歴史と漢文のスペシャリストである彼に、歴史と漢詩文それぞれ 2 つの命令を出している(以下の内容は文化史で覚え方なども扱うが、通史にも関連する箇所なので説明しておく)。まず、歴史のスペシャリストとして命じたのが、『類聚国史』の編纂。これは六国史を神祇・仏教・田地・風俗などの内容別にそれぞれ分類したもの。そもそも、『類聚国史』の「類聚」という言葉の意味は「内容別」という意味なので、直訳すれば内容別の国史(国の歴史書)ということがわかるよね(この類聚という言葉を用いた『類聚三代格』も、『弘仁格式』・『貞観格式』・『延喜格式』の 3 つの格を内容別に分類したもの)。

< 六国史 >

奈良時代・平安時代に律令国家により編纂された『日本書紀』・『続日本紀』・『日本後紀』・『続日本後紀』・『日本文徳天皇実録』・『日本三代実録』の 6 つの正史の総称を六国史という。簡単に言えば、正史とは政府が編纂した歴史書のことで、それが全部で 6 つあり、それをまとめて六国史と言うわけである(「日本書紀」～「続日本後紀」までの「紀」を「記」にしないよう注意して欲しい)。ただし、これらは以下に記したように、内容は天皇の時代ごとに記されたものであり、例えば「田地の歴史」を調べたい時には、それぞれ何冊にもまたがって調べないとならない。そこで、宇多天皇が菅原道真に命じて、それぞれ神祇・仏教・田地・風俗などの内容別に分類させたものが『類聚国史』である。

聚

天皇	成立	六 国 史	内 容	編 者	
元正	720 年	『 <u>日本書紀</u> 』	神代～ <u>持統</u>	<u>舎人親王</u>	『 <u>類聚国史</u> 』 <u>菅原道真</u> が 六国史を 内容別に 分類したもの
桓武	797 年	『 <u>続日本紀</u> 』	文武～桓武	菅野真道・藤原継縄	
仁明	840 年	『 <u>日本後紀</u> 』	桓武～淳和	藤原緒嗣・藤原冬嗣	
清和	869 年	『 <u>続日本後紀</u> 』	仁明一代	藤原良房	
陽成	879 年	『 <u>日本文徳天皇実録</u> 』	文徳一代	藤原基経	
醍醐	901 年	『 <u>日本三代実録</u> 』	<u>清和</u> ・ <u>陽成</u> ・ <u>光孝</u>	藤原時平・菅原道真	

そして、菅原道真は『菅家文草』という自らの漢詩文集を編集しちゃうほど(菅原家のことを菅家という)、漢詩文のスペシャリストでもある。つまり、漢文で詩を書けちゃうレベルで、中国語にも通じているので、遣唐使としても十分な能力を有している。…これに注目したのが、最近めっきり出番の少なくなった藤原時平。

藤原時平「道真の奴、最近調子に乗ってるからな〜。ここで、遣唐使として中国に派遣して、日本から追い出しちまえばちょうどいいじゃねえか！」

そこで、藤原時平は宇多天皇に提案した。

藤原時平「最近、遣唐使派遣してないっすよね？しばらくぶりに、派遣してみたらどうですか？特に道真なんか漢詩文に優れているから、ちょうどいいすよ？」

宇多天皇「確かにそうだな。よし道真を呼んでみよう。」

そこで、宇多天皇は菅原道真を遣唐使のトップである遣唐大使に任命したんだけど、菅原道真も時平の目的はお見通しだ。

菅原道真「(時平め、遣唐使で私を日本から追い出すつもりだな…。そうはいかないぞ)。宇多天皇、もはや遣唐使なんて派遣しなくてもいいと思いますよ？その理由はいろいろあるんですけど…」

- (1) 唐の衰退(755年〜763年の安史の乱(安祿山・史思明の乱)以降の唐は衰退し、875年には黄巢の乱が起きた。これは鎮定されたが最終的に907年に唐は滅亡した)
- (2) 航路の危険性(当時は新羅との関係悪化のため、危険な航路である南路をとっていた)
- (3) 新羅の海賊の活動(関係が悪化した新羅の命令で、新羅の海賊が対馬・北九州を襲っていた)
- (4) 派遣費用調達の困難(朝廷の財政難により、遣唐使派遣の費用の調達が困難だった)
- (5) 唐の民間商船の頻繁な来航(今までは遣唐使のもと中国の珍しい陶磁器や書籍などの唐物を輸入していたが、この頃には唐の民間商人が大宰府(博多津)などに頻繁に来航していたため、遣唐使のような公的な交渉を続ける必要性がなくなった)

つまりは、「遣唐使の航路は南路という航路を使っているんで、唐に行くのは危険だし、最近では唐の民間商船が大宰府(博多津)にやって来ている。しかも、肝心の唐は衰退していて、いずれは滅亡するだろうから、遣唐使はもはや必要ないよ」ということ。こうして、菅原道真の建議を受けて、宇多天皇は894年に遣唐使の停止を決定することにしたんだ。

A 遣唐使の廃止『菅家文草』by 菅原道真

諸公卿をして遣唐使の進止を議定せしむことを謂ふの状。

右、臣某、謹みて在唐の僧中瓊、去年三月商客王訥等に附して到る所の記録を案ずるに、大唐の凋弊、之を載すこと具なり。……臣等状して願はくは、中瓊の記録の状を以て、遍く公卿・博士に下し、詳らかに其の可否を定められむことを。国の大事にして、独り身のためにあらず。且く款誠を陳べ、伏して処分を請ふ。謹みて言す。

寛平六年九月十四日、大使参議勘解由次官従四位下兼守左大弁行式部権大輔春宮亮 菅原朝臣某
(諸公卿に遣唐使派遣の是非を審議していただくことを申請する上書

私(菅原道真)が中国の中瓊が去年(893年)王訥に通じて送ってきた記録を見てみると、唐の衰退が詳細に記録されております。…(中略)…そこで、詳細に検討し派遣の是非をお願いいたします。

寛平6年(894年)9月14日、大使(遣唐大使)菅原道真)

その後、宇多天皇は31歳という若さで、14歳であった息子の醍醐天皇に譲位する。宇多天皇は別に病気がちであったというわけでもない。ではなぜ、まだ少年の皇太子に位を譲ってしまったんだろう？これは、自分がまだ若く壮健なうちに譲位することで、摂関政治ではなく、「天皇親政」という路線を定着させようと考えていたからなんだ。

でも、醍醐天皇はまだ 14 歳で右も左もわからないお子ちゃま。そこで、『寛平御遺誡』という、天皇としての日常の振舞い方とか、作法・年中行事などの注意事項といった訓戒を書き記しておいたんだ。なお、その中には、藤原氏には気をつけろ、摂政・関白は置かないように、その藤原氏の対抗馬として菅原道真を重用しろ、などといった内容も書いてあったんだよね。

[E] 延喜・天曆の治ーテキスト P16 対応ー

こうして、897 年に即位した醍醐天皇は、ちゃんと父親の訓戒通りに、延喜の治と呼ばれる摂政・関白を置かない天皇親政を始めていく。そして、醍醐天皇は親父が記した『寛平御遺誡』に基づいて、藤原時平を左大臣に任命し、その対抗馬として菅原道真を右大臣に任命したんだ。

でも、当然これが面白くない人物がいる。そりゃあ、もちろん藤原時平。時平は、一応トップの地位にあたる左大臣にはいるけど、その自分とほぼ同等の地位の右大臣に、完全に成り上がり者である道真が就任している。そして、名目上では自分の方が上だけど、道真の方が重用されている状況だ。こうなったら、藤原時平にとって手段は一つしかない。そう、藤原氏のファイナルウェポン、必殺技の「陰謀」だ！そして、その菅原道真を失脚させるために起こしたものが、901 年の昌泰の変なんだ。

<昌泰の変(901)>

901 年、菅原道真が娘婿の齊世親王を天皇に即位させようとしているという藤原時平の讒言により、菅原道真は大宰府に左遷された事件。当時、菅原道真は自分の娘を齊世親王(醍醐天皇の兄弟)に嫁がせていたが、道真が醍醐天皇を廃して、その齊世親王を天皇に即位させようとしていると、藤原時平が讒言。このため、激怒した醍醐天皇は道真の大宰府への左遷を命令。道真左遷の知らせを聞いた宇多法皇は驚き、醍醐天皇に直談判しようと裸足で駆けつけたが、役人にはばまれて内裏に入ることもできず、門の前にそのまま 1 日中立ちつくしていたと伝えられている。また、道真には一言の弁解も許されなかった。これにより、道真は大宰権帥(大宰府の仮の長官)として、大宰府へ左遷され、失意のうち 2 年後の 903 年に大宰府で没した。この事件を当時の年号から昌泰の変という。



[大宰府の配所にて天皇から賜った衣を取り出して昔を偲ぶ菅原道真]

ところが、この道真左遷の後、道真左遷に関わった人たちが相次いで死んだり、醍醐天皇の皇太子保明親王や慶頼親王が急死したり、全国的には疫病や天災などが相次いだ。終いには、平城宮の清涼殿に落雷が落ちて 2 名が即死するなど、道真が怨霊となりタタリをなしているのではないかと噂になっていった。そこで、その怨霊を静めるために京都に北野神社を建立し、道真を祀ったのである。なお、右の絵画は菅原道真の生涯や怨霊説話などを描いた、鎌倉時代の絵巻物『北野天神縁起絵巻』。



[清涼殿の藤原時平を襲う雷神と化した菅原道真]

こうしてみると、醍醐天皇って君たちが今まで思っていたイメージと違うんじゃないかな？醍醐天皇といえば、後の村上天皇と並んで「延喜・天曆の治」と呼ばれる理想的な天皇親政を行った人物と言われる。

でも、実際はそんな大したことは行っていない。実は、この「延喜・天曆の治」というのは、後の南北朝時代の後醍醐天皇によって、理想化されただけなんだ。まあ、鎌倉幕府を倒して、自ら天皇親政を行おうとした後醍醐天皇にとっては、平安時代に天皇親政を行っていた醍醐天皇を美化しておきたいだろうしね(醍醐天皇にあやかっただけで後醍醐天皇と自ら名乗ったぐらいだし)。

じゃあ、実際の政治はどんな感じだったかというと、律令制度を維持しようと懸命にもがき苦しんでいるだけだったりする。というか、律令制度の崩壊が進んで、末期的な状況だったんだよね。

この頃には、公地公民制に基づいて班田収授法を行おうとしても、農民たちが浮浪・逃亡・偽籍などを繰り返しているせいで、そこにいるべき農民がいないので、口分田を配れないわ、税も徴収できないわ、で律令制度は完全に崩壊していた。そんな状況下で、902年に延喜の莊園整理令が出されたり、最後の班田収授を行ってみたりしたんだけど、どちらも結局うまくいかず。挙句の果てには、家臣の三善清行から、914年に「意見封事十二箇条」というものを提出されて、律令体制に基づく土地制度はもう全く機能していないんですよ、と指摘されてしまうんだ(これらの詳細に関しては土地制度史で扱うので省略する)。

だから、延喜の治というのは名ばかりのものであって、政治的な中身をとまなっているものではない。ただし、ここまで理想化されるには、ある程度の政策も行われているはず。実は延喜の治が評価されたのは、政治的なことではなく以下のような文化的な業績が大きいんだよね。

(1)『日本三代実録』(901)＝六国史の最後。清和・陽成・光孝天皇の3代を記録する。

(2)『古今和歌集』(905)＝最初の勅撰和歌集(八代集の最初)

(3)『延喜式』(927)＝三代格式(『弘仁格式』『貞観格式』『延喜格式』)の一つで、唯一完備現存。

これらに関しては文化史でも扱うけど、醍醐天皇は文化的な業績が優れていたんだってイメージを持っていると文化史でも楽になると思うよ。

その後、天皇親政を進めた醍醐天皇は930年に亡くなったため、その子供の朱雀天皇が即位する。でも、先ほどの道真の崇りのためか醍醐天皇の皇子が相次いで死んでいたので、朱雀天皇はわずか8歳にすぎなかった。そのため、すぐに藤原忠平が摂政となつて、成人後は関白として政治を担当していくんだ。そして、その朱雀天皇時に起きたのが、承平・天慶の乱と呼ばれる平将門の乱・藤原純友の乱だ。

＜承平・天慶の乱(935～941)－平将門の乱(935～940)－＞

承平・天慶の乱とは、承平(931～938)・天慶(938～947)年間に起こった平将門の乱と藤原純友の乱の総称のことである。

平将門は桓武平氏の祖である高望王(平高望)の孫として、下総国(現在の千葉県)の猿島を拠点とした豪族であった。そもそも、彼の祖父である高望王(平高望)は桓武天皇の曾孫であったが、朝廷の財政悪化のため、皇族から外されて天皇の臣下という立場になり、「平」の姓を与えられた(こうした皇族から離れ、臣下の籍に降りることを臣籍降下という)。そのため、彼の子孫を桓武天皇の血を引く平氏ということで桓武平氏という。

将門は従兄弟の貞盛と同じように、15～16歳の頃に平安京へ出て、時の関白である藤原忠平に仕えるなど、12年ほど在京してから故郷下総に戻るようになった。しかし、久しぶりに帰って来た地元の所領には、なぜか伯父の平国香が住んでいたのであった。

将門「ただいま～」

国香「おっ、おかえり～」

将門「…え？ちょ、ちょっと、おじさん！ここ僕の家ですよ！」

国香「そうだよ？で、何か？」

将門「いやいやいやいやいや、僕の家は何でおじさんがいるんすか！」

国香「いや～、しばらくお前の顔見なかったから、失踪でもしたんじゃないかね～と思ってさ。

だから、お前の家も所領も俺がもらっておいたんだ。」

将門「はあ！？現に今俺がここに帰ってきてるじゃないすか！」

国香「知らねえよ。お前のもんは俺のもんだろ？」

これは国香が悪い…。そのため、将門は 935 年におじの^{たいらのくに}平国香を殺害し、この知らせを受けて急遽都から戻ってきた国香の子^{たいらのきだもり}平貞盛にも見事勝利した。貞盛はこのことを朝廷に訴えたが、その訴えは却下され、将門の関東における名声は一躍高まることになった(この事件が起きた「承平」年間、将門が国家に対して反乱を起こしたわけではない。ゆえに、平将門の乱・藤原純友の乱を総称した「承平・天慶の乱」は、「天慶の乱」という方が妥当であると思う。入試で記述する場合は、「承平・天慶の乱」と書くべきだが、このことを知っている、後述する平将門の乱の史料では、「天慶」の元号しか出てこないことにも合点がいくだろう)。

こうした将門の名声を慕って、^{おきよ}興世王や^{ふじわらの}藤原玄明といった者たちが将門の保護を求めるようになっていった。彼らは、略奪などを繰り返して、国司から追われている身の犯罪者であったが、親分肌の強い将門親分は彼らを匿うことにしたのであった。しかし、そんな将門のもとに常陸の国司がやってくる。

国司「お〜い、将門さんよ？あんなのところに藤原玄明って犯罪者がいるだろ？さっさと出せや！」

将門「藤原玄明？そんな奴知りませんな〜」

国司「てめえ、お前が^{かくま}匿ってるのは、こちとら知ってるんだよ」

将門「知らねえもんは知らねえって言ってんだろ？ここは俺の土地だぞ？さっさと帰れや！」

国司「くっ…！お前どうなっても知らねえぞ！」

さすがに、これはやばい。国司から追及されてしまったら、将門にもその罪が及ぶかもしれない。そのため、興世王と藤原玄明は将門に自首することを申し出た。

二人「将門さん、すんません。俺らのせいで将門さんまで巻き込んでしまって…。俺ら、もう自首しようと思います…」

将門「な〜に、言ってんだお前ら。お前らはもはや俺の仲間だろ。仲間のピンチを俺が見過ごすわけねえだろ。いずれ、国司が逮捕しにくるかもしれないねえ？それなら、国司を先に襲っちゃえばいいってばよ！」

こうして、939 年、将門は^{ひたち}常陸(現在の茨城県)の国府(国司の役所)を襲撃してしまったわけである(この襲撃事件を起こした「天慶」年間からが国家への反乱の始まりになる)。

しかし、国府を襲撃してしまったことは、朝廷に対して反乱を起こしたということになる。「それならば、いっそのこと関東全域を奪ってしまって、しばらく様子を見てみたらどうか」という興世王の提案を受けて、将門は続けて^{しもつ}下野(現在の栃木県)・^{こうずけ}上野(現在の群馬県)の国府も襲撃して、これを攻略することに成功した。そして、そんな絶好調の将門のもとに一人の巫女がやってきて、こう告げた。

巫女「将門さん、あなたは桓武天皇の血を引いているそうですね。

菅原道真公のお言葉をそなたに授けましょう。将門よ、そなたこそ京都の朝廷に代わる新しい天皇となるのです！」

こうして、将門は自らを新しい天皇である^{みくにのみこと}新皇と称して、京都の朝廷を真似し、関東に新しい御所を設けるなどしていった。その後、一段落ついたということで、家臣たちをいったん自分たちの所領に戻らせたのだが、その隙を見逃さなかったのが、以前将門に父を殺され、自身も敗れていた^{たいらのきだもり}平貞盛であった。貞盛は、ムカゲ退治の伝説で有名な^{しもつ}下野押領使(諸国に設置された犯罪者追捕の職)^{ふじわらの}藤原秀郷と協力して、将門の拠点を襲撃し、討つことに成功したのであった。



なお、平将門の乱についての経緯などは、院政期に成立した軍記物語『将門記』に記されている。

㊦ 平将門の乱『将門記』

……天慶二年十一月廿一日をもて、常陸国に渉る。国は兼ねて警固を備へて、将門を相待つ。……よりに彼此合戦の程に、国の軍三千人、員のごとく討ち取られたり。

時に武蔵権守興世王、竊に将門に議りて云はく、「案内を検しむるに、一国を討ちたりといへども、公の責め軽からじ。同じくは坂東を虜掠して、暫く気色を聞かむ」てへり。将門報答して云はく、「将門が念ふところも皆これのみ。その由何となれば…苟くも将門、刹帝の苗裔、三世の末葉なり。同じくは八国より始めて、兼ねて王城を虜領せむと欲ふ。……」といへり。

また数千の兵を帯いて、天慶二年十二月十一日をもて、先ず下野国に渡る。……将門を名けて新皇と曰ふ。
(天慶2年(939年)11月21日に(将門は)常陸国に兵を進めた。常陸国司側はすでに警固を整えて将門の軍を待ち受けていた。……合戦の結果、常陸国の軍勢3000人が討ち取られた。

この時、武蔵権守の興世王はひそかに将門に誘いをかけて言った。「過去の例からみると、わずか一国を討つたに過ぎなくとも、朝廷からの処罰は軽くはない。どうせ同じことなら関東全体を奪い取って、しばらく様子をうかがったらどうだ。」将門も答えていう。「将門が思うところも同じだ。何となれば、……苟くも自分は刹帝の苗裔(桓武天皇の末裔)で三世の末葉(高望王三世の子孫)である。同じことなら関東八国から始めて、都まで征服したいと思う。」という。

さらに数千の兵を従えて、天慶2年(939年)12月11日にまず下野国に侵入した。…将門を名付けて新皇という。)

＜承平・天慶の乱(935～941)－藤原純友の乱(939～941)－＞

平将門が関東で暴れているのと同じ頃、四国でも大暴れしている者がいた。それが、藤原純友の乱。藤原純友は、もともと伊予掾の立場であり、伊予国(現在の愛媛県)の日振島を拠点にしていた。伊予「掾」とは、律令制度の四等官制でも学習した守・介・掾・目の3番目「掾」のことであり、伊予国司のNo.3ということになる。つまりは、藤原純友はもともと伊予国司という朝廷に仕える立場であったのだが、その彼がなぜ反乱を起こしてしまったのだろうか？

彼は伊予国司として、もともと瀬戸内海の高賊を取り締まる立場にあった(瀬戸内海は米がそれほど取れないため、生活が厳しく高賊などの略奪行為をする者が多かった)。そして、その高賊を取り締まっていたのだが、ある日、取り締まった片腕のない赤髪の高賊にこう言われる。

純友「おい、高賊！何でてめえ高賊なんて略奪行為をしているんだ！」

赤髪「ふっ…、なに言ってるんだ。俺と一緒に海に出ようぜ、高賊は楽しいぞ。」

…というわけで、純友は高賊になってしまったのである(多少の脚色は致し方ないと思われる。わからない者はggrks。…いや、「シャンクス」とググってみるとよい)。

そして、関東で暴れる平将門と同時期に、瀬戸内海の高賊を率いて大宰府などを襲撃して反乱を起こした。しかし、その途中で家臣の裏切りなどもあり、清和源氏の祖である源経基と追捕使(押領使と並ぶ犯罪者追捕のための職)小野好古によって鎮圧された。

承平・天慶の乱が起きた朱雀天皇は病弱で男子に恵まれなかったため、自分の弟を皇太子に立てることにした。そして、その弟で即位した人物が村上天皇だ。その村上天皇時の初期は、前代から引き継ぎ藤原忠平が関白をつとめていたんだけど、彼の死後は摂政・関白を置かず、自分の父の醍醐天皇と同じ天皇親政を進めていくんだ。その村上天皇の治世を天暦の治という(この醍醐・村上天皇の両治世のことを延喜・天暦の治という)。

でも、やっぱりこの天暦の治も醍醐天皇の延喜の治と同じく、後世に理想化されただけで、実際には大した政治は行われてはいない。実際に行われた政策としては、承平・天慶の乱の後、朝廷の財政

が逼迫していたので儉約に努め、物価を安定させるために **958 年**、**乾元大宝**を鑄造したぐらいしか目立ったものはない。なお、この乾元大宝以降、朝廷による貨幣発行は停止されたため、この乾元大宝が**皇朝十二銭**(古代律令国家が鑄造した十二種類の貨幣のこと)の**最後**となるんだ。なお、宇多天皇・醍醐天皇・朱雀天皇・村上天皇の時期に摂関は正誤問題でも狙われるので、以下で確認しておこう。

＜宇多・醍醐・朱雀・村上天皇のまとめ＞――

- ① **宇多天皇**…最初、藤原基経が関白を務めるが、彼の死後は摂関をおかず天皇親政＝「**寛平の治**」
- ② **醍醐天皇**…摂関は置かず天皇親政＝「**延喜の治**」
- ③ **朱雀天皇**…藤原忠平が摂政・関白を務める
- ④ **村上天皇**…最初、藤原忠平が関白を務めるが、彼の死後は摂関を置かず天皇親政＝「**天曆の治**」

〔E〕藤原実頼ーテキスト P16 対応ー

天皇親政を行った村上天皇は、息子の**冷泉天皇**が成人してもあえて譲位せずに、20 年近くも天皇を続けていた。なぜかという、実は冷泉天皇が白痴(知能障害)だったため、自分が死んだ後に不安を持っていた、長く皇位についたままだったんだ。でも、村上天皇も年齢には勝てず、967 年には息子の**冷泉天皇**が即位する。当然、冷泉天皇は資質的な欠陥があるため、藤原氏に政治を頼らざるをえない。そのため、**冷泉天皇**時には**藤原実頼**が関白として政治を補佐することになるんだ。

それゆえ、この冷泉天皇時から藤原氏が勢力を盛り返していく。例えば、その当時の関白・太政大臣は藤原実頼、そして、右大臣や大納言も藤原氏の勢力が占めていた。しかし、その中で**左大臣**だけは藤原氏ではなく、**醍醐天皇の皇子**の**源高明**という人物が就いていたんだ(皇族が皇族の身分から臣下の身分になる臣籍降下によって、源姓を名乗っていた)。それゆえ、藤原氏としては、源高明は藤原氏が権力を確立する上で、最大の障害だった。そこで、この源高明を排除するために再び藤原氏が動く。それが **969 年**の**安和の変**だ。

＜安和の変(969)の覚え方＞――

「黒くてゴメンね、アンナのあそこ」
→ く(9)ろ(6)く(9), アンナ(安和)

＜**安和の変(969)**＞――

969 年、藤原氏の策謀により、**醍醐天皇の皇子**、**左大臣 源高明**が失脚させられ**大宰府**に左遷させられた事件。当時、源高明は自分の娘を村上天皇の皇子、為平親王に嫁がせており、為平親王は有力な天皇後継者の一人であった。その娘婿である為平親王を奉じ、源高明が謀叛を起こそうとしていると **源満仲**(源経基の子で、清和天皇の血を引く清和源氏)が密告した。これにより、源高明は**大宰権帥**として**大宰府**に左遷されることとなった。なお、源高明と源満仲は同じ源の姓であるが、兄弟などではない。既述したように、天皇の皇子の中には臣籍降下した者が多く、醍醐天皇の皇子であっても、村上天皇の皇子であっても、清和天皇の皇子であっても源という姓を名乗る場合が多かった。例えば、今回の源密仲は清和天皇の子孫であり、応天門の変の容疑者にあげられた源信は嵯峨天皇の皇子である。そして、それら子孫が別れて、いろいろな各地域に土着していくようになる。その土着していった地域の名をとって、甲斐源氏(源義光)や、河内源氏(源頼信)、摂津源氏(源頼光)といったように呼ばれるようになった。この中で、今回の密告者である源密仲は**摂津国**の**多田荘**に土着したため、**多田源氏**などと呼ばれたのである。彼はこの事件後、藤原氏と結び政界に進出するようになり、その子の**源頼信**・**頼光**兄弟も同じく政界に進出していった。

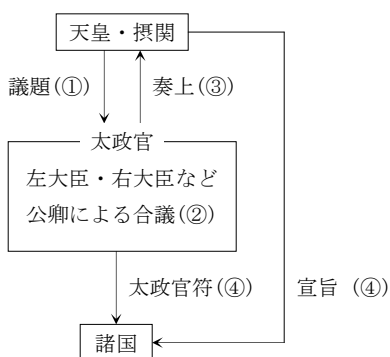
この安和の変により、今まで藤原氏に対抗してきた他勢力の排斥が終了したため、藤原北家の政治的地位は安定し、**安和の変以降**、摂関は必ず置かれるようになる。なお、この**源高明**は『西宮記』という朝廷の年中行事などを記した儀式書を著しているけど、その背景に関しては後で説明しよう。

[F] 藤原兼通・兼家一テキスト P17 対応ー

藤原氏の権力が確立すると、今度はその藤原氏の中で権力争いが起きていくようになる。つまり、醜い家族間の権力争いだね。その藤原氏のトップである氏長者という地位をめぐって、兄弟間や親族間で権力争いが起きていくんだ(氏長者とは、多くの家々に分かれた藤原氏一族の棟梁とも言うべきもので、大きな権力を握ることになる。そして、この氏長者になると、各地にある藤原氏代々の所領である殿下渡領を継承することができる)。

<陣定>

この頃になると、藤原氏の氏長者となった人物が摂政・関白に就任して政務を担当していたが、この氏長者による独裁政治が行われるというわけではない。この頃でも、主たる政治は、左大臣や右大臣・大納言・参議といった太政官での公卿の合議によって決定された。その話し合いの中でも、外交や財政に関わる重要な問題に関しては、内裏の近衛の陣という場所で行われる陣定(国政の重要事項を審議した会議のうち、最も重要なもの)で取り決められた。そして、話し合われた内容は天皇、もしくは摂関の決裁を経て、太政官符・宣旨などで命令・伝達された。少し難しい言葉で説明したが、簡単に政治の話し合いの流れを図解すると以下のようになる。



まず、天皇や摂政・関白が、外交や財政・叙位・受領任命など話し合う議題を公卿たちに出す(①)。それを左大臣や右大臣・大納言・中納言・参議といった公卿が近衛の陣で合議する(②)。この中で特に重要な内容を審議した会議を陣定という。そして、その合議で決まった内容を天皇 or 摂関に奏上し、それを天皇 or 摂関が決裁する(③)。最後に、これが諸官司や諸国に命令・伝達されるので、その際に太政官から出されるものを太政官符、天皇から出されるものを宣旨という(④)。

このように、当時の政治運営は摂関政治のもとでも、天皇が太政官を通じて全国に命令・伝達する形をとっていた。でも、平穏な時代が続くと、次第に先例や儀式を重んじる形式的なものになり、宮廷では年中行事が発達していく。そのため、先ほどの源高明の『西宮記』や藤原公任の『北山抄』といった、朝廷の年中行事や儀式を記した書物が著されるようになるんだ。こういった朝廷の年中行事や儀式を研究する学問を有職故実という(読みは「ゆうしょく」ではなく、「ゆうそく」なので気をつけてね)。なお、これらの有職故実書などは文化史の内容だけど、通史でも説明した方が理解しやすいので付け加えて説明しておいただけ。

先に述べたように、安和の変により藤原氏の摂関の地位が不動のものとなると、今度は藤原氏内部で摂政・関白の地位をめぐって兄弟間などで争いが起きるようになる。特に、この中では、藤原兼通(兄)・藤原兼家(弟)や、藤原道隆(兄)・藤原道兼(弟)の兄弟間の争い、藤原道長(叔父)・藤原伊周(甥)の叔父・甥の争いが有名。なお、入試で問われるのは、この権力争いをした人物の名前だけで内容はまったく問われない。ただ、道長・伊周以外の名前はややこしいし混乱しやすいので、右のゴロで覚えておけばいいかな。

<氏長者の覚え方>

「金、家に満ちたかね？」

「金、家(兼家)に満ち(兼通) たか(道隆)(か)ね(道兼)？」

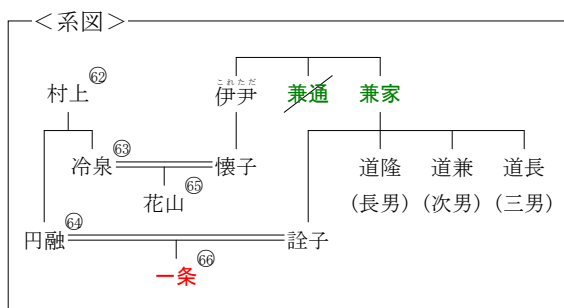
まあ、人物しか問われないから、丸暗記すれば良い話なんだけど、僕自身が流れを理解しないと納得できない性格だったので、古文的な知識を埋め合わせる意味でも一連の争いを簡単に説明しておこう。入試では、以下の流れは問われないから、面倒であつたら完全に飛ばして[G] 藤原道長から読み進めてくれて全然構わない。

安和の変の時の氏長者は藤原実頼^{みねのり}だったが、実頼には子供がいなかったので、弟の師輔^{しほ}が摂関となった。でも、この師輔が死んだ後、その子供の兄弟間で権力争いをしたのが、兄の兼通^{かねみち}と弟の兼家^{かねけ}だった。この二人は相当仲が悪かったことで有名で、後の院政期に編纂された『大鏡』や『栄華物語』にも載っている程仲が悪かったんだ。

この勝負において最初に勝ったのは兄の藤原兼通^{ふじわらのかねみち}で、彼が関白の職に就いた。ところが、問題なことに彼には子供がいなかった。普通であれば、自分に息子がなくて跡を継がせられないのなら、血を分けた弟の兼家に譲ってあげるのが筋だよね。ところが、この兄弟にそんな兄弟愛などは存在しない。そして、兼通は自らの死が近づいてきた最中に、突如弟の兼家やその他の貴族を集め、最後の人事発表を行ったんだ。「よ〜し、みんな集まったな。俺はもう死期が近いし、関白の仕事として最後の人事発表を行う。……う〜んとね、次の関白は、いとこの藤原頼忠にする！そして、弟の兼家は〜、降格処分！」…と、兼家を格下げしてから、その後に死んでいった。嫌がらせもここまでくると、すごいものがあるよね。

もう兼家としてみれば、ブチキレ状態。正直「死んだ兄貴をもう一度生き返らして、デスノートで行動を操って殺してやりたい」くらいの勢いだ。だから、その降格処分をくらった後は、体調不良を理由に朝廷に出仕さえしなくなったんだ。もちろん本当は病気にはかかってなく仮病なんだけど、こうした兼家の現状を不憫に思ったんだろうね。従兄弟の頼忠(兄の兼通により関白に就任した人物)は、兼家を右大臣にしてあげたんだ。そうしたら、兼家の立ち直りの早いこと早いこと。「マジで？右大臣にしてくれるとは本当悪いね〜、頼忠君〜」って感謝感激雨あられ。

とはいえ、右大臣に昇進したものの、まだトップの関白にはなれていない。では、関白に就任するための一番の近道とは何だろう？それは簡単。今までの先祖と同じように天皇と外戚関係になってしまえばいい。そこで、その後に自分の娘の詮子^{せんし}を当時の円融天皇^{えんゆうてんのう}に嫁がせて、二人の間に子供を産ませたんだ(この子供が後の一条天皇^{いちじょうてんのう}となります)。さて、これで天皇に自分の娘を嫁がせて、後に一条天皇となる皇子が産まれたわけだよね。そうしたら、後はいかにして今の天皇を辞めさせて、孫の一条天皇を即位させるかだ(この当時には、既に円融天皇は退位して花山天皇^{かざんてんのう}が即位していた)。そこで、彼はその花山天皇を辞めさせるために策略を練る。少し系図を確認してみよう。



実は、その当時花山天皇は失意のどん底にあった。今まで大好きで大好きでしようがなかった低子^{しじ}という女性が死んでしまい、来る日も来る日も泣いていたんだ。そんな花山天皇のもとに、兼家は息子の道兼(兼家の次男)を遣いに出す。

(道兼)「花山天皇、お悔やみ申し上げます。」

(花山)「うん…。もうマロね、ダメかもしれないマロ。」

(道兼)「何を言っているんですか、天皇。でも、こんな時こそ亡くなられた低子様のご冥福をお祈りすべきだと思うんですよ。」

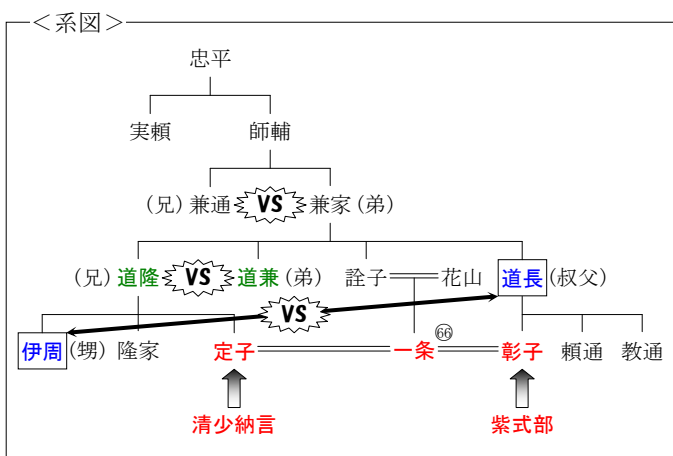
(花山)「そ、そうマロね…。それなら低子も喜ぶだろうマロが、どうすればいいマロ？」
 (道兼)「そうですね…。それには出家なさるのが一番のご冥福になるんじゃないでしょうか。」
 (花山)「そ、そうマロね。確かに愛しい低子のためなら出家しても構わないマロ…。」
 (道兼)「もし、花山天皇が出家なさるおつもりでしたら、私も一緒に出家しますよ。」
 (花山)「本当マロか？道兼は何ていい人マロね！それなら、マロと一緒に頭丸めに行くマロよ！」
 ということで、二人で剃髪するために寺に向かった。そして、まず花山天皇から先に髪を剃って坊主になったんだ。

(花山)「うん、身も心も綺麗さっぱりしたマロね。よし、次は道兼の番マロね。」
 (道兼)「あつ、天皇申し訳ございません。実は私、頭を丸めることを父親に告げてきていないんですよ。ですので、いったん父親に報告してまいります。」
 (花山)「そ、そうマロか？じゃあ、早く帰ってきてくれマロね。」

と、言って道兼は帰ってしまい、二度と戻ってくることはなかったとさ。つまり、花山天皇は道兼にまんまと騙され、出家してしまったわけだね。これによって、花山天皇は出家したため、天皇を辞めざるをえない。そこで、花山天皇に代わり**一条天皇**が即位し、その一条天皇の外戚にあたる**藤原兼家**が、その後関白に就任する。こうして、兼家は一度兄の兼通によって降格させられたものの、外戚関係を利用することによって関白へと昇進することに成功したわけだ。つまり、兼通(兄) VS 兼家(弟)の政権争い第一次ラウンドは、兼通がいったん勝利するものの、彼が死去した後に兼家が関白に就任したわけだね。ゆえに、どちらも勝者と言えることができるけど、子供に恵まれ、道長を輩出した兼家の方が勝者と言えるかな。

[G] 藤原道長ーテキストP17対応ー

その後、兼家が死亡すると、長男の**道隆**・次男の**道兼**・三男の**道長**の3人の息子が権力を争うことになる。兼家が死ぬと、最初に長男の道隆が関白になり、その後、次男の道兼が関白になった。でも、995年に流行病にかかって、二人とも死亡してしまった。ということは、二人の兄が死んだということは、次は三男の道長の番だね。ところが、そこに「ちょっと待った～～!!」と対抗馬が現れたんだ。その対抗馬にいたのが道隆の子の**伊周**。



彼ら二人はそれぞれ当時の天皇である**一条天皇**との外戚関係を利用することで権力を握ろうとした。まず、伊周の方は自分の妹にあたる**藤原定子**を一条天皇の中宮として入内させた(この定子の家庭教師を務めたのが『枕草子』を著した**清少納言**)。これに対し、藤原道長も自分の娘の**藤原彰子**を一条天皇の中宮として入内させた(この彰子の家庭教師を務めたのが『源氏物語』を著した**紫式部**)。こちらも系図を確認しておこう。

<一条天皇の中宮>

藤原定子(藤原伊周の妹) = 一条天皇の中宮 / 家庭教師は『枕草子』作者の**清少納言**
藤原彰子(藤原道長の娘) = 一条天皇の中宮 / 家庭教師は『源氏物語』作者の**紫式部**

結果、道長と伊周の争いは道長の勝利になる。これは、藤原道長が自分の姉である詮子(一条天皇の母)に、自分を関白にしてほしいと一条天皇に言ってもらえるよう頼んだから。詮子は当時の一条天皇の母であるので、その母親から頼まれたら一条天皇もさすがにノーとは言えないよね。ただし、一条天皇としてはすぐに関白に任命するのは少し早すぎるんじゃないかと判断したため、道長を関白に準じる役職である内覧に任命したんだ。この内覧とは、関白となるべき者に大臣経験がない場合や、関白が病気のため執政不可能なときに任じられるもので、簡単に言えば臨時の関白だと思ってくれればいいかな。

一方で、道長との権力争いに敗れた伊周は大宰府に大宰権帥として左遷されてしまった。同じく伊周の弟の隆家も同じく、伊周の後に大宰権帥に左遷されている(その左遷された大宰府で隆家が後に活躍するのですが、それは後でのお楽しみ)。これにより、伊周や隆家という反対勢力も排除した道長は、1016年に摂政、翌年の1017年に太政大臣へとスピード出世していく(ただし、道長は一度も関白には就任していない)。出世のペースとしては、これは相当早いものなのなんだけど、普通なら一年置きにこれほどまでの出世することなんて出来ない。では、なぜ彼がこれほど出世することができたのか？これもやはり外戚関係によるものだったんだ。

まず、当時の一条天皇に自分の娘である彰子を嫁がせたことは先ほど説明したよね。ところが、その後、一条天皇が病気になってしまったため、三条天皇が即位することになる。そこで、今度は、次の三条天皇にも自分の娘藤原妍子を嫁がせることにしたんだ。

でも、この三条天皇と妍子の間に子供が生まれず、逆に一条天皇と彰子の間に子供が生まれてしまった(この子供が後の後一条天皇)。そこで、道長は三条天皇に迫って、後一条天皇の即位を要望する。

(道長)「ちょっと、話があるんだけどさ。」

(三条)「どうしたマロか？」

(道長)「あのさ、俺の一条天皇と彰子の間に敦成親王(後の後一条天皇)が生まれたの知ってる？」

(三条)「もちろん知ってるマロよー。おめでとうマロね〜。」

(道長)「おう、ありがとう。でもさ、俺としてはさ、早く敦成親王が天皇になってほしいのよ。」

(三条)「えっ？その気持ちはわかるマロけど〜、今はマロが天皇やってるマロよ？」

(道長)「そんなん知ってるよ。だから、俺の言いたいことわかる？」

(三条)「う、う〜ん、よくわからないマロ…。」

(道長)「うん。君天皇辞めてってこと。」

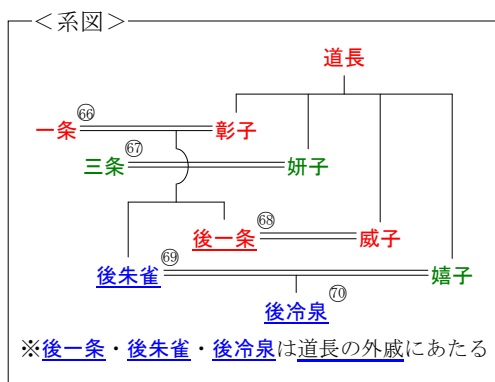
(三条)「えっ！何言ってるマロか！マロが天皇に決まってるマロよ！」

(道長)「…もう一回言わなきゃアカンのか？おい、コラ？」

(三条)「…は、はい。じゃあ僕天皇辞めます…。」

と、無理やり三条天皇を譲位させて、自分の孫の後一条天皇を即位させちゃった。そして、今度はこの外戚関係を安定させるために、その自分の孫である後一条天皇に、自分の娘の藤原威子を嫁がせたんだ。…ここまで近親相姦の嵐だと気持ち悪いな…、自分の孫に自分の娘を嫁がせるわけだもん。

ところが、後一条天皇と威子の間に子供が生まれないということで、今度はその弟の後朱雀天皇(後一条天皇と彰子の間に生まれたもう一人の子)にも自分の娘の藤原嬉子を嫁がせる。そして、その二人の間に後冷泉天皇が誕生することになるんだ。ゆえに、道長が嫁がせた娘達と、それぞれその天皇と娘の間に生まれた後一条・後朱雀・後冷泉天皇が藤原道長の外戚にあたる天皇ってことになるね。



こうした近親間での婚姻が相次いで行われたわけだけど、道長の娘の嫁ぎ先をそれぞれまとめると「一条天皇＝彰子」・「三条天皇＝妍子」・「後一条天皇＝威子」・「後朱雀天皇＝嬉子」ということになる。ただし、天皇も娘もたくさんいるので覚えられない。そこで、こうした娘と嫁ぎ先の天皇の関係は、右のゴロで覚えておけば大丈夫だろう。

＜藤原道長 4 娘の覚え方＞

「一生酒乞い、以後好き」

→ い(一条) っ し ょ う (彰子)

さ (三条) け (妍子)

ご い (後一条) い (威子)

ご す (後朱雀) き (嬉子)

ここまで近親相姦のオンパレードをやっちゃうと、道長としてはもう面白すぎて笑いが止まらない。特に、彼の高笑いが止まらなかったのが、1018 年に三番目の娘藤原威子が後一条天皇の中宮に入内した時だろうね。そりゃあ、「俺、自分の孫(後一条天皇)に娘(威子)を嫁がせてる www(´ω`)」って感じで、権力をほしいままにした人生の絶頂期だ。

なお、この入内の際に、それを祝った宴会が開かれるんだけど、その宴会の席で自分の栄華を誇って詠んだ歌が、「此世をば、我世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば」という「望月の歌」だ。要約すれば、「この世の中はもう自分の世の中みてえだな。満月みたいに俺の栄華も欠けることもないじゃねえの」という内容(でも、満月ってこの後少しづつ欠けていくよね? 笑)。そして、この内容がその宴会の場にいた藤原実資という人物の日記『小右記』に記してあるんだ。

㊦ 藤原道長の栄華『小右記』 by 藤原実資

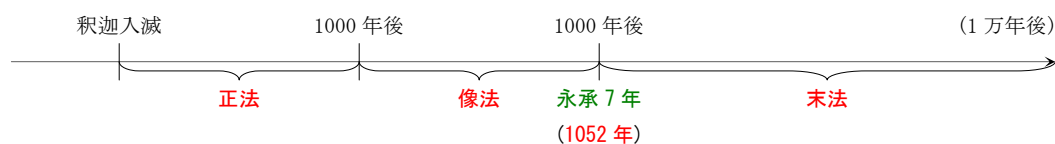
(寛仁二年十月)十六日乙巳、今日女御藤原威子を以て、皇后に立つつるの日なり。(前太政大臣第三娘。一家、三后を立つは未曾有なり)……太閤、下官を招き呼びて云く、「和歌を読まんと欲す。必ず和すべし」者。答へて云く、「何ぞ和し奉らざらんや。」又云く、「誇りたる歌になむ有る。但し宿構に非ず」者。「此世をば、我世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば。」余申して云く、「御歌優美なり、酬答に方無し。満座ただ此の歌を誦すべし……」と。

(寛仁二年(1018 年)、本日は藤原威子が後一条天皇の皇后になる日である。(彼女は前太政大臣(藤原道長)の三女で、一族から三后(彰子・妍子・威子)と 3 人も妃が出るのは未だかつてないことである)。太閤(藤原道長)が下官(私=藤原実資)を招き、「和歌を詠もうと思う。必ず返歌を詠みなさい」というので、「きっと返歌いたしましょう」と返事をした。藤原道長は続けて「誇らしく思っつつくった歌であり、以前から準備していたのではない」ともいい、「此の世をば、我世とぞ思ふ望月のかけたることも無しと思へば」と詠んだ。余(私=藤原実資)は「素晴らしい歌でしたので返歌などできません。みなさんでこの歌を唱和しましょう」といった。)

でも、その席上で盛り上がりすぎたのか、それとも飲みすぎたのか、いきなり道真が倒れて病気になってしまったんだ。危うく一命は取りとめ、何とか病氣も治ったんだけど、この時によっぽど彼自身「死」というものを意識したんだろうね。生きているうちは特に怖いものはないけど、やっぱり死んだ後の世界は当時でも怖かった。そのため、これ以降の道長は、仏教の世界にドはまりしていくことになるんだ。なお、当時は仏教界の思想で、末法思想というものがめちゃめちゃ流行っていたため、それも後押しをすることになる。

＜末法思想＞

釈迦(ブッダ)の入滅(死去)後、しだいに仏教が衰え、釈迦の教えが正しく行われなくなる時代が来るという预言思想。釈迦の入滅から 1000 年間を正法といい、この期間は釈迦の教えが正しく伝わる時代とされた。その後の 1000 年間を像法といい、釈迦の教えが徐々に乱れはじめる時代、そして、その後から 1 万年の間を末法といい、釈迦の教えが衰える乱世であるといわれた。日本では、永承7年(1052 年)がその末法元年にあたるとされ、その当時の戦乱や疫病などの社会不安とあいまって、浄土教の信仰が盛んになっていった。



こうした末法思想における末法元年(永承7年=1052年)も近づいていたから、さすがの道長も死んだ後にどうなるのか怖くなってきた。そこで、病気が治った後に出家して、藤原氏の政治は全て息子の頼通に任せて、浄土教に突っ走り、1020年には自宅の近くに超豪華な法成寺という寺を建立したんだ。そして、完成した次の日から法成寺にずっと通って、8年間も毎日念仏を唱えて過ごし、成仏していったそうだ。

なお、この道長は死ぬ時に、その法成寺にある阿弥陀如来像の指5本に五色のヒモをつけて、その糸の先を自分の指5本にくくりつけて死んでいった。つまり、「仏様の指と、俺の指はこの糸で結ばれてるから、自分が死んだら阿弥陀様に極楽浄土に連れていってもらえるぞ〜」と、腐女子バリの妄想を披露して死んでいったわけだね。ああ、キモイ(笑)。また、その当時絢爛豪華であったその法成寺は、その後焼けてしまったため、現存はしていない。

こうした道長が仏門に入るまでの出来事を、道長自ら日記に記しているんだけど、それを『御堂関白記』という。この道長の日記が『御堂関白記』であったことから、道長は別名(あだ名)で「御堂関白」と呼ばれている。

ただし、ここで一番気をつけてほしいのが、「御堂関白」と呼ばれたものの、道長自身が関白に就いたことは一度もないこと。「御堂関白」と呼ばれたにもかかわらず、関白に就任したことがないというのも、おかしい話だね。まあ、疑問に思う人もいると思うので簡単に説明しておく、実はもともと彼のあだ名は平安期にはただの「御堂殿」だった(「御堂」とは法成寺のことをさす)。でも、江戸時代に道長の日記に対し『御堂関白記』という名称が流布してしまったため、「御堂関白」という呼び名が広まってしまったと言われているんだ。

[H] 藤原頼通ーテキスト P17 対応ー

道長が出家して引退したため、藤原氏の氏長者はその子の藤原頼通が跡を継ぐ。彼には、道長が残してくれた後一条・後朱雀・後冷泉天皇という外戚関係が残っているため、特に何をしなくても、後一条・後朱雀・後冷泉天皇の摂政・関白を50年近くも続けて権力を握っていったんだ。

そして、この藤原頼通は日本史を勉強する受験生にとっては、本当に神レベルの人。なぜなら、彼は50年間も摂関の地位にありながら、ほとんど何も歴史的な事をしていないから。だから、50年間も摂関をやっていたのに、この時代で歴史的に覚えることはたったの二つだけでいいのだ。受験生にとっては何て素晴らしい人(笑)。

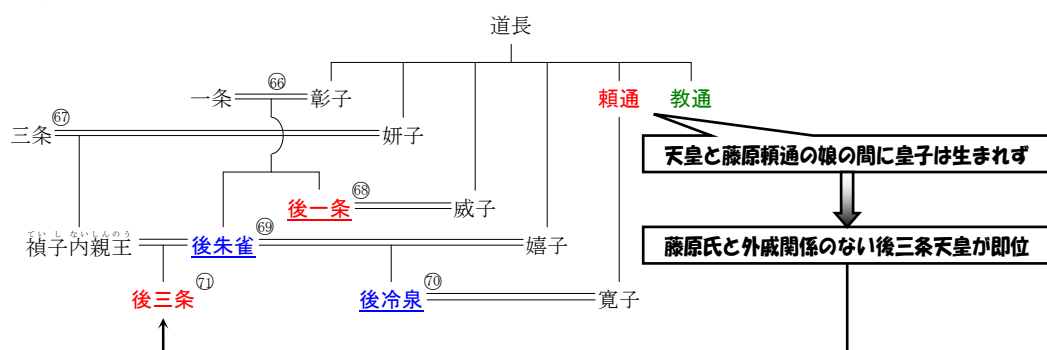
その一つ目の事件が、1019年に起きた力伊の入寇。朝鮮には高麗という国があったよね？さらに、その高麗の北には契丹族という民族がいたんだけど、その支配下の女真族(朝鮮では力伊と呼ぶ)という奴らがいきなり日本に攻めてきたんだ。もともと女真族は高麗を攻撃していたんだけど、その調子に乗ってわざわざ日本の九州まで攻めてきて、日本人とかを拉致しようとしてきたわけだ。まあ、いわば現在でいう北朝鮮みたいな国。いきなり南の高麗に攻め込んで、今度は日本にやってきましたら拉致をしていって…(実際に1289人の日本人が拉致されている)。でも、この傍若無人な奴等に対し、勇敢に立ち向かった人物がいた。それが、先ほどの道長との権力争いに敗れて、大宰府に太宰権帥として赴任していた藤原隆家(藤原伊周の弟)だったんだ。そして、鬱憤を晴らすかのように、見事に刀伊を撃退している。

＜刀伊の入寇(1019)の覚え方＞
「遠い国から刀伊の入寇」
→ とお(10)い(1)く(9)

この事件は北〇鮮のせいで起きてしまったような事件だから、頼通が何も悪くない。むしろ、頼通の人格は、非常におおらかで無頓着な人だった。だから、実はその当時に騒がれていた末法思想に関しても、あまり関心を持っていなかったんだ。末法思想というのは、先ほど説明したように、永承7年(1052年)から末法元年が始まり、不吉なことが起きるようになるという予言だよ。

ところが、その末法思想に対しても、頼通は「ふ〜〜ん」程度。これには、周りの家臣達も慌てて「頼通さん！さすがに末法元年なんですし、災いとかが起きないように寺とか造ったらどうですか？」と提案したんだ。そうしたら、頼通は「あっ、そうなの？じゃあ、寺でも造っておくか〜」っていうことで、頼通によって1053年に京都の宇治に建てられたのが、10円玉でも有名な平等院鳳凰堂なんだ(この平等院鳳凰堂が宇治にあることから、頼通のことを「宇治殿」と呼ぶ)。それにしても末法元年の始まるのが1052年なので、普通ならその前から寺を造るのに、その末法元年の翌年の1053年になってからようやく建てるなんて相当無頓着な人だったんだろうね。

<系図>



こうして50年近くも政権の中心であった藤原頼通だったが、実はある問題点があった。系図を見てもらえばわかるように、藤原氏は天皇との外戚関係を維持するために、相当な近親相姦を繰り返したよね。こういう状態が続くと、血が濃すぎることから子供(特に男子)が生まれにくくなってしまう。そのため、頼通の娘には天皇との間の子供が生まれなかったんだ。

その結果、後冷泉天皇が亡くなると、1068年に藤原氏を外戚としない後三条天皇が即位することになった。後三条天皇は、後朱雀天皇と皇族の女の間に生まれた天皇で、藤原氏の娘を母に持っていないから外戚関係は存在しない。ということは、後三条天皇は外戚関係ではない藤原氏を優遇することとはなくなる。そして、藤原氏に政治は委ねず、天皇自ら政治を行う天皇親政を進めていくんだ。

こうした後三条天皇の即位に対して、藤原頼通のとった対応もなかなかのもの。後三条天皇が就いた瞬間に「もう政治に未練はない」と言って、宇治に引きこもって引退してしまったんだ。そのため、この後は頼通に代わり弟の藤原教通が関白を継ぐことになるんだけど、後三条天皇にとっては関白なんて居ても居なくても関係ない(関白が持つ権限は、天皇からの議題や太政官からの奏上に、事前に目を通す内覧程度なので、天皇が関白に相談しなければいいだけ)。そして、後三条天皇が始めた天皇親政によって、摂関政治は終焉を迎えることになる。だから、藤原氏を外戚としない後三条天皇は、歴史のターニングポイントになるところなので、しっかりと押さえておいてね。